

高校生

との対話

悩みことではないけれど

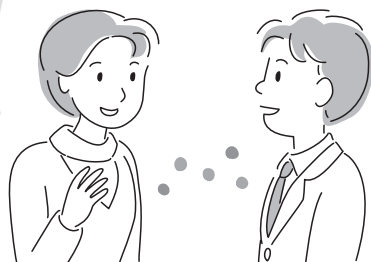
A子さんは、横に座っている同級生のB子さんと顔を見合わせると、ニコニコ笑ってこう言いました。

「あのー、今、なんだかなくなってることっていえば……、クラスのみんながJKすぎてツライです」

卒業生との雑談で

試験明けの土曜日、卒業生のNさんを廊下で見かけました。仕事が休みなので、

「クラスみんながJKすぎてツライ」



私立中学校高等学校教諭

伊藤 久仁子

いとう くにこ 勤務する中高一貫校で文章表現力育成に取り組んでいます。モットーは「転んで学ぶ」。ストレス解消は書店めぐり。学校心理士。

部活練習のお手伝いに来たそうです。オープンスペースの一角でしばし立ち話となりました。

「現役の高校生って、何を考えているんでしょうね？ 私が高校生のときは、今思えばどうってことないことで悩んでましたけど」

と笑うNさん。

「じゃあ、きいてみようか？」

たまたま近くの机で雑談していたA子さんとB子さん（高校二年生）に声をかけてみたところ、暇だったのか、すぐにやってきました。

営業職のNさんは、聞き上手でした。

Nさんも後輩の質問に応じて、大学受験の体験談や、仕事のようすについて率直に語ってくれましたが、Nさんの自己開示に促されるように、A子さんが「悩みごとっていうほどでもないけど」と笑いながら語ったのが、冒頭の「クラスのみんながJKすぎてツライ」という言葉でした。

もちろん、「JK」とは「女子高校生」を指すスラングです。

「JKすぎる」ってどんな状態？

A子さんは、勉強も部活もほどよくがんばっている生徒です。ほどよく、というのとは、どこことなく肩の力が抜けた感じがあつて、ひょうひょうとした雰囲気

醸し出しているからです。授業中もユニークな視点の発言で、みんなをよく笑わせていました。

私は思わず、「自分たちもJKなのに『JKすぎる』ってどういう状態？」と質問しました。

「青春ほい」のが 気恥ずかしい

A子さんは「それはですね」と、解説してくれました。

「ロングホームルームで、文化祭のクラス企画とか、話し合ったわけですよ。そうしたら、お化け屋敷やろうよ！とか、飲食やろうよ！とか、熱く提案する人とかいてですね、まあ、反対ってわけじゃないけど、そんなにやりたいんだあ……とか、思っちゃうんですよ。なんか一見、『青春！』って感じで話し合ってるんだけど、いまいち入っていけないっていうか、なんか、この人たち、いかにもJK楽しんでますって感じだなくって、ちょっと恥ずかしくなっちゃったんですよ。

あゝもちろん、そんなこと絶対顔に出

したりしないですよ。タイミングが合えば、ちゃんと意見も言うし」

いかにもJKな 「制服デイズニー」

次にB子さんが挙げた例は、「制服デイズニー」です。

「休みの日なんか友達と、制服でデイズニーランドに行っちゃおうとするでしょ。いわゆる『制服デイズニー』ですね。で、こうやって（自撮りのポーズをしてみせる）写真を撮って、ソッコー、インスタに上げちゃったりして、それがまためちゃめちゃ楽しそうな写真なんですよね。楽しそうでいいなあと思う反面、なんかお約束通りだなんて感じもして、照れる」

私は思わず、「そうだったんだ。でも、『JKすぎる』って言うけど、そういう自分たちもJKで、しかも、私から見ると、二人ともかなり楽しくやってそうに見えるんですけど。まさか当事者がそういうふうにいるとは思っていただけねえ……」と、つい茶化したようなことを言っていました。

熱中できない自分は変？

するとA子さんは、

「いやいやいや、けっこうツライものがありますよ。……あの、先生にこういうことぶっちゃけるのもどうかとは思ってますけど、でも正直、うちの文化祭って、他校に比べるとなんか地味っていうか、お祭りが足りなくてっていうか、規制が厳しいじゃないですか。どっちかっていうと、生徒が盛り上がるっていうより、親とか受験生に見せたいっていうか、私には生徒が自主的にやっている学校説明会？みたいな感じがしちゃう。それなのに、あんなにアツくなれるっていうのは何だろうね？」

と笑っています。

B子さんも「だよねえ」と、頷いています。

見抜かれていた 「大人の都合」

にこやかに話しているわりに、けっこ

う辛辣で、私は、痛いところを突かれた気がしました。

文化祭についての大人たちの思惑や、無自覚な本音の部分を、生徒はちゃんと汲み取っているのだけれど、あえて言わないだけでした。いわゆる「大人の配慮」です。

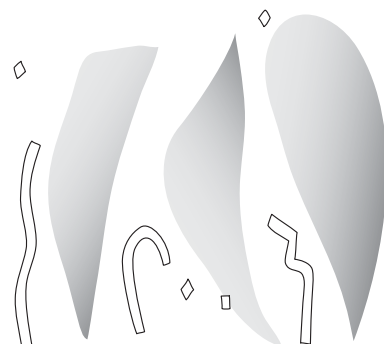
人は、黙っているからといって、気づいていないわけではありません。

先輩の助言

「どういうのもありだよ」

Nさんは、先輩たちの話を聞きながら「あゝ、あるある」と頷きました。

「クラスの中で温度差みたいなものは絶対あるよ。私が高校生のときは、ほとんど部活のことしか考えてなかったから、クラスのほうは手を抜いていたっていうか、クラスにかける情熱は部活で使い果たしてました。『ごめん！ここはもうみんなにおまかせするからヨロシク』みたいな。もちろん、仕事の分担なんかでは、迷惑かけないようにしたけど、クラスにはゆるく参加してました。でも、ほんと



に部活だけががんばっていたから、当時の自分にとっては部活が『ザ・青春！』だったな。部活のためだけに学校に来てたよ。

でもまあ、人それぞれ熱中できる分野がずれているから、そういう文化祭にアツい人たちにひいちゃう気持ちになったとしても、そういうのもありでしょ。ところで、二人は部活は何かかな？」

「私は軽音部でバンドやってます」とA子さん。B子さんはてへっと笑って「私は、去年、中学からやってたバスケット部辞

めちゃって、帰宅部です」。

そしてA子さんとB子さんは、「JKっぽく」去っていく、Nさんは体育館に出かけていきました。

「らしさ」の呪縛に向き合って



こんな先輩後輩の会話を、面白く聞いていた私ですが、「…らしくふるまわなければならぬ」という固定観念や、集団が一丸となって進む方向に同調しきれないときに生じる違和感については、共感を覚えました。

本音では同意できないのに、心から賛同しているかのような反応を期待されるときの葛藤や居心地の悪さ。それは、大人たちが日々、職場などで味わっている感情です。

その違和感と、どうにか折り合いをつけるのが大人の日常だとすれば、まさに大人の世界に移行しつつある二人なのでした。

(本事例は複数の事例を再構成しています)